

『いつの空にも星が出ていた』

佐藤多佳子 // 著

物静かな高校の先生。予備校に通う女子高生。家業の電気店を継いだ若者。少年野球のピッチャー、洋食店のシェフ。一見なんのつながりもない人たちを結んでいる、強くてまっすぐな気持ち。どこまでも熱くて、かぎりなく純粋な、人生と応援の物語。



(講談社)



(幻冬舎)

『白鳥とコウモリ』 東野圭吾 // 著

遺体で発見された善良な弁護士・白石健介。ひとりの男が殺害を自供し事件は解決…のはずだった。「すべて、私がやりました。すべての事件の犯人は私です」。東野圭吾版『罪と罰』。

『クララとお日さま』 カズオ・イシグロ // 著、土屋政雄 // 訳

訳子供の愛玩用に開発された人工フレンドのクララ。好奇心旺盛で店のウィンドウから外の世界を観察するのが大好きだ。ある少女の家庭に買われていったクララは、やがて一家の大きな秘密を知ること…。愛とは、知性とは、家族とは？根源的な問いに迫る感動作。



(早川書房)

『ザリガニの鳴くところ』

ディーリア・オーエンズ // 著、友廣純 // 訳

ノースカロライナ州の湿地で村の青年の死体が発見された。人々は真っ先に、「湿地の少女」と呼ばれているカイアを疑う。6歳のときからたったひとり生き延びてきたカイアは、果たして犯人なのか？



(早川書房)

『世界史は化学でできている』

絶対に面白い化学入門 左巻健男 // 著

化学が人類の歴史にどのように影響を与えてきたかを紹介する、白熱のサイエンスエンターテインメント。化学という学問の知的探求の営みを伝えると同時に、人間の夢や欲望を形にしてきた「化学」の美学として面白さを、図解、イラストも用いて伝える。



(徳間書店)

『私たちはどう働くべきか』 池上彰 // 著



(徳間書店)

ウィズコロナ時代になって働き方が大きく変わってしまった。私たちはこの先、どのように働いていけばいいのか？テレワークはもちろん、外国人移民やAIとの共存、この時代にふさわしい転職、副業等を詳説。また著者自身の「働き方」も初解説する。

『ポストコロナ期を生きるきみたちへ』

内田樹 // 編、斎藤幸平 // ほか著

コロナ・パンデミックによって世界は変わった。わたしたちは矛盾に満ちた世界をどうするか分岐点に立っている。この「歴史的転換点」以後の世界を生きる中高生たちに向けて、5つの世代、20名の識者が伝える「生き延びるための知恵」の数々。



(晶文社)



(筑摩書房)

『問いの立て方』 宮野公樹 // 著

質問、テーマ、問題といった小さなものから、人生の課題、目標、テーマといった大きなものまで、「問い」には様々な形がある。では、どの問いにも通用するその考え方とはなにか？その見つけ方・磨き方とあわせて解説する。

『中高生の悩みを「理系センス」で解決する40のヒント』

竹内薫 // 著 (PHP研究所)

『「死にたい」「消えたい」と思ったことがあるあなたへ』

河出書房新社 // 編、磯野真穂 // ほか著 (河出書房新社)

『モヤモヤしている女の子のための読書案内』

堀越英美 // 著 (河出書房新社)

『わたしのおうち チャレンジと支援スタッフの物語』

伊藤暢彦 // 著 (新日本出版社)

『日本の教育はダメじゃない 国際比較データで問いなおす』

小松光 // 著、ジェルミー・ラブリー // 著 (筑摩書房)

『地域学をはじめよう』 山下祐介 // 著 (岩波書店)

『国境なき技師団 スマトラ島から東北へ』

濱田政則 // ほか著 (早稲田大学出版部)

『ぼくは挑戦人』 ちゃんへん // 著 (ホーム社)



『値段がわかれば社会がわかる はじめての経済学』

徳田賢二 // 著 (筑摩書房)

『「ニュートリノと重力波」のことが一冊でまるごとわかる』

郡和範 // 著 (ベレ出版)

『生態学者の目のツケドコロ』 伊勢武史 // 著 (ベレ出版)

『「環境の科学」が一冊でまるごとわかる』

斎藤勝裕 // 著 (ベレ出版)

『高校生からの韓国語入門』 稲川右樹 // 著 (筑摩書房)

『野球の戦い方 マルチアングル戦術図解』

高見泰範 // 著 (ベースボール・マガジン社)

『ラグビーの基礎』 長島章 // 著 (ベースボール・マガジン社)

『テニス・インテリジェンス 勝てる頭脳が身につく魔法の教科書』

田中信弥 // 著 (KADOKAWA)

『はたらく細胞06』 清水茜 // 著 (講談社)



『天を測る』 今野敏 // 著 (講談社)